

〔論説〕

# 日本的応報原理を超えるもの

佐伯 啓 思

(一)

前回の論考（『日本人の信仰心とキリスト教』倫理研究所紀要第三十三号）で、私は、ハビアンを論じる山本七平の『日本教徒』をとりあげたが、今回もまたこの主題を続けたい。

江戸初期のクリシタンであった不干斎ハビアンは、もともと禅僧であったが、やがてクリシタンとなりイエズス会のイルマンになる。その後、彼はクリシタンも捨てる。面白いのは、それら棄教の理由をハビアン自身が書き残していることだ。仏教、儒教、神道に対する批判を述べた『妙貞問答』、それにキリスト教批判の書である『破提字子』（はだいうす）を残した。（ハビアンについては、遠藤周作や三浦朱門なども取り上げているが、近年の著作では釈徹宗『不干斎ハビアン』新潮社が要をえている。）

『妙貞問答』でするどくかつ合理的な儒仏神批判を展開し、キリスト教の優位を説いたハビアンは、その後クリシタンも放棄し、後に『破提字子』を書いて一転、激しくキリスト教を批判した。

ハビアン（一五六五―一六二二）の棄教は、バテレン追放令（一五八七年）によるものではなく、尼さんとの駆け落ちというなかなか破天荒な事情も含めて、基本的には自らの信念にもとづくものであった。つまり、彼は、儒仏神すべての宗教を冷めた目で批判したあげくに、最後のキリスト教も棄教したわけである。

その理由を山本は、前回も述べたように、次のように解釈している。ハビアンにとって真に信じるものは、決して「でうす」の教義などではなく、いわば「日本教的自然法」とでもいうべき、日本に特有の一種の疑似宗教的観念であった、という。それを、ハビアンは「ナツウラの教え」と呼ぶのだが、その内実は「現世安穩」と「後生善所」だと山本はいう。これはもともと『法華経』で説かれる言葉であるが、山本が言いたいのは、万象にはおのずとなる秩序が存在し、人もその秩序に従う限りで現世では安穩に過ごし、死後はよき場所に生まれるという信仰といえば信仰、それが日本特有の「ナツウラの教え」である。その「日本教的自然法」を現実に実現する便法としてキリシタンを信奉したのだ、という。

山本の言いたいことは明快である、仏教であれ、儒教であれ、キリスト教であれ、もともと外来の宗教的な価値体系を日本人は受け入れるものの、「本心」からそれを信じているわけではない。その背後には、常に変わらない「日本的な価値」が流れている。そして、外来の信仰体系は、この底流の日本的価値と矛盾しない形で、むしろ、それと融合しつつ受容される。この独特のやり方こそが「日本的方式」なのである。表層では、日本人は、いくらでも外来の価値観を受容する。しかし、根底に流れるいかにも「日本的なもの」を失うことはない。ハビアンとはまさにそうした「日本人」だった。それは、おそらく、現代にいたるまで「世界」における日本の生き方の基本モデルといってよいであろう。

ハビアンはいう。「柳は緑、花は紅。これこそは自然の道理である」と。それを柳の根を砕いてみても緑はな

く、花の木を割いてみても紅はない。しかし、柳も花も自然天然のままに現成しているのではないか。このあらゆるものが「天然自然のまま」という世の中のあり方、それこそが「ナツウラの教え」なのである。

世界の万事万象が、バラバラに現成するのではなく、相互につながりながら秩序を保って現象するという思想。仏教的にいえば、因縁生起による万物の相依相即、古神道的にいえば、万物一体の自然観とほとんど同様の発想をここに見ることができよう。この万象が相依相即しつつ、そのそれぞれが「おのずとある」ようなあり方、万事が「自然天然のまま」に現成している存在の仕方こそ「ナツウラの教え」の根本にある。

かくて、日本人が「自然」という言葉を発する時、人為や作為を超えた「ありのままにある」という独特の存在様式が暗示されている。動物も草木も山川もすべてが、ありのままにある。人も同様である。しかも人は動物や植物と違って、自らのありように対して自覺的たりうる存在である。とすれば、「ありのままにある」あり方、「おのずとある」ようなあり方に対して人は無自覺ではありえない。「柳は緑、花は紅」とは仏教でもしばしばいわれることであるが、それでは「人が人である」とはどういうことだろうか。そのためには何が必要なのであるか。

ここにおいて、日本人は、ある独特の観念を生みだした。それは「恩」である。万事がその所をえて、そのあるべき姿として存在し、人々がおのずとある秩序に従う時、「現世安穩」と「後生善所」が実現する。

しかし、この「おのずとある秩序」とは何か。それこそが「日本教的自然法」の内容をなすのだが、それは何か。山本は、それをハビアンがキリシタンのために抄訳した『平家物語』のなかに読み取ろうとする。

『平家物語』の主題は何か。それは、平氏（とりわけ清盛）の驕りこそが平家一族の没落をもたらした、という点にあった。ハビアンにとっては、盛者必衰や諸行無常のごとき天然自然の動きが平家没落をもたらしたのでは

なく、そこには合理的な（正当な）理由がなければならなかった。それは、平家の驕り、傲慢、慢心にほかならない。傲慢とは、世界の真ん中に自分を鎮座せしめて、他者を顧みない自己中心性である。その傲慢がやがて自らを滅ぼす。「人を人とも思わぬ者はやがて滅びる」ということである。そして「人を人とは思わぬ慢心」とは、言い換えれば、人や社会といった、自分を取り囲むこの環境世界から受けた「恩」を忘却し、それに対する感謝の念も失うことである。自己がこの世界の様々な存在によって生かされているという至極当然の事実を忘れ去ることである。ところが、人は、しばしばこの当然の事実を忘れる。

「現世安穩」とは、この世が、明快な制度や法ではないにしても、ひとつの確たる自然な秩序によって成り立っていることを意味し、その根本には、人々が互に恩を与え、また恩を受けるという相互性がある。われわれは誰も決して一人で生きるわけではない。天子がおり、親がおり、兄弟や友人がおり、それに、われわれの食物となる動植物がある。自然の恵みがあり、肥沃な土地があつて食料が供給され、それによって始めて命をつなぐことができる。人々は、そこにひとつの秩序を作り出した。それが日本における「自然法」であり「ナツウラの教え」である。「自然法」の秩序を守る時にはじめて「現世安穩」が現成し、その秩序に従って生きる時、人は満足してあの世へ往生する。

この「ナツウラの教え」というべき人間相互の関係を取り結ぶものを山本は「恩」といった。「恩」の授受とは心理上の貸し借りである。「恩」を受けた者は一種の「債務」を負う。彼には何らかの形で「恩」の返済が課される。誰もが他人に対して何がしかの「恩」を負っており、社会は人々の間の「恩」の貸借によって成立しているのだから、そこには「相互債務」が発生する。貸し借りは一方的であってはならない。相手に債務を与えることは、相手からの債務の返済を呼び起こす。

ちょうど、マルセル・モースが『贈与論』で述べたように、メラネシアやポリネシアの社会秩序を可能とする「贈与」は、相手に対して一種の心理的な負債を呼び起こし、この負債の感覚は相手からの「返礼」(対抗贈与)を引き出す。しかも、この贈与が心理的負債をもたらすのは、その贈物に「マナ」(メラネシア)や「ハウ」(ポリネシア)と呼ばれる特有の神秘的で霊的な力が宿っているからであった。

この互酬的な相互性を日本人は「恩」と呼んだ。そして日本人にとっての「恩」の独特な意味をことのほか重視したのは、『菊と刀』におけるルース・ベネディクトであった。このアメリカ人の文化人類学者にとっては、東洋人、とりわけ日本人が、祖先という過去へと遡及し、血縁に対して決定的な何かを負っているという負債感覚を持つことはきわめて印象的であった。日本人は、現在の生を、「祖先」と「世間」に負っており、その過ぎ去った時間と目の前の同時代とをひと続きにして包括する「負債」とみる。この「相互債務の巨大な網状組織」こそが日本社会の秩序を作っているのだ。

ただし、ベネディクトは、英語では通常「オブリゲーション」と言われる強い義務の感覚を「恩」と等値し、人が背負う債務のすべてを英語の「オブリゲーション」だとした。その結果、日本人が、たとえば親や教師や目上の者などから受けた負い目への返礼が最高級の「義務」となる。「恩を忘れない」ことこそが日本人の習性のなかで最高級の道徳的価値を占めてきた、と彼女は述べる。その「恩を忘れない」習性がもたら一直線に天皇へと方向付けられたのが戦前の日本であった。

あの戦争への道を辿った日本文化の分析を目的とするこの文化人類学者の所論の妥当性はともかく、ただ、ベネディクトが「恩」のやり取りに「日本人の基本的要請」をみたことに注目しておきたい。確かに、人間関係を「恩」による「相互債務状態」と見なす「目には見えない価値観」が、多かれ少なかれ日本社会の「現世安穩」

を成立させていることは、おそらく相当に深く日本人の心情の奥に根を張った事実であろう。

## (一)

そのことをハビアンは、『平家物語』を借りて論じる。『平家物語』の世界は一千年以上昔だといっても、もちろんメラネシアやポリネシアのような未開部族ではない。だがそれでも、荒くれた関東武士の台頭によって崩れゆく貴族社会にあつて、まだかろうじて贈与と返礼という相互性の網の目が社会秩序を構成している点では、メラネシアも平安日本も大差はない。

『平家物語』において、平重盛は四つの恩がある、という。天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩の四つである。「天地」「国王」「父母（それに先祖）」「衆生」と並べてみれば、少なくとも最初の三者は、神秘的靈性とは言わないにしても、世俗的な好嫌や利害やなれ合いを超えた、ある種の権威が秩序の源泉となり、いつてみれば世俗化されたハウ（靈力）の残影を漂わせている。そこに衆生を加えた四つの主要な「恩」が社会秩序を支えているというのが『平家物語』の立場であつた。したがって、法王を法王とも思わず、父母への恩義も忘れ、衆生などもとより眼中にはない清盛こそ、見事なまでの「恩知らず」であり、「人を人とも思わない」罪深い人物に他ならない。

それゆえ平家の滅亡は必然であつた。平家を動かした清盛の傲慢、つまり「忘恩」は「ナツウラの教え」に反するのである。平家の没落は諸行無常や盛者必衰などといういかにも仏教的諦念に起因するものではなく、「日本教的自然法」に背くというまぎれもない悪行の帰結なのであつた。